

垂水史談会報

第 51 号
2023 (令和 5) 年
5 月発行

【報告】

令和五年度 垂水市談会総会 — 垂水市民館 —

四月十五日（土）、令和五年度総会を開催し約二十名が参加しました。

総会では町田猛会長、坂元教育長のあいさつ、市長の祝電披露の後、令和四年度の経過報告及び決算報告、また令和五年度の計画及び予算案が承認されました。

新年度では三年ぶりに会費徴収を開始すること、毎月第4日曜日の午前中に市内の現地研修を行うことなどが新たに付け加えられ、図書館における催し（展示等）も了承されました。

なお、新年度役員の三役は町田会長、瀬角事務局長は続投、副会長は欠員。その他役員も続投ですが、隈元信氏が新たに役員に加わりました。



総会終了後、水之上地区のよめじよ川の水分神社、新たに竣工した荒人神社などを研修しました。

因みに、今年度の二月は「第六垂水丸」遭難事故後八〇年、また来年は史談会が復活してから三〇年という節目の年にあたり、また戦後八〇年という年でもあります。これからも史談会の活動に会員各位のご協力をお願いします。

月	第4日曜	現地研修 (予定)
5月		櫻島焼亡塔、公卿石ほか
6月		新城島津家墓地ほか
7月		六地藏塔、陵(みささぎ)ほか
8月		大野・垂桜周辺
9月		協和地区の田の神さあ
10月		田の神さあ、宍籠の滝ほか
11月		かねさっどん、陸軍所の水
12月		垂水麓地区の散策
1月		老神神社ほか
2月		勝軍地蔵、高城の堀切ほか
3月		お長屋、島津墓地ほか

「北迫正治」原画展を開催

4月1日〜30日、市立図書館において、市教育委員会との共催で「北迫正治」原画展を開催しました。北迫さんは昭和23（1948）年に元垂水で生れ育ちました。

ところが大学2年生のとき、ラグビーの試合中に頸椎（首の骨）を骨折して肩から下がマヒして動かなくなり、ベッドに寝たきりの生活になりました。

人一倍の頑張り屋でスポーツマンだったので、「死んでしまいたい」などと自暴自棄になったこともありま



したが、寝たままでもペンを口でくわえて文字や絵を描くことに挑戦し、たくさん作品を残しました。その中から今回は20作品を選び展示しました。

《原画展に会場された方からのアンケートから》

「勇気をもらいました。つらい時等あったときは、荒崎パーキングまで行きます。」「毎年励まされます。来年もお願いします。」「昨年ここに伺って正治君に一年間勇気をもらい、また今日ここで頑張った事にふれて、身が引き締まる思いです。来年も会いに来たいと思います。」「とても素晴らしい男性でした。感謝。」



日本遺産 第3回「麓祭」

4月30日、垂水小学校北隣の「有馬邸」で「麓祭」が開催されました。垂水の麓を見直そうと今回で3回目となります。

会場では着物の布地を活用した手提げや小物入れ、麓武士の手内職として発達した「垂水人形」、さらに千本イチョウに因んで「銀杏おこわ」が販売されました。

山田義之氏による西郷隆盛、東郷平八郎、勝海舟の掛け軸の説明の後、庭先では女性有志の「ハンヤ節」「渋谷音頭」など、華やかな踊りで花を添えました。さらに、「まち歩き」で立ち寄った東川隆太郎氏の飛び入りの挨拶もありました。



西南之役 私学校生徒の従軍譚 ⑦

—立山健氏への聞き書き— (山口栄之 筆記)

竹田の苦戦 (立山氏の談にもとづいて)

湯の村という所に一週間ばかり居て、それから日州(日向)に越えて富高新町に出で、中一日居て細島へ行き、さらに延岡に行き、二、三日して豊後(大分)の竹田に向かった。

竹田に着くや否や、いきなり敵の台場に突撃を試みた。ところが意外に猛烈な射撃を受け、たちまち味方が将棋倒しになった。これでは一気に乗っ取ること不可能とあって、ひとまず此方も台場を築造して、その陰に止まることとなった。その台場の互いの距離が甚だ接近したもので、両方から握り飯を投げ合ったくらいである。(ここに堀之内吉蔵氏の談を挿入す。)

(敵味方の台場が頗る接近していたので、銃砲声の鎮まった夜など話し声が良く聞こえた。そこで悪口を言って罵り合ったり、あるいは石を投げ合ったりしたのであるが、後には狎れて来て握り飯を投げてやったりなどして戯れた。) 又立山談に戻る。朝、いったん台場に這入ったきり夕方までは決して出られぬ。それに初夏の暑い天日が照りつけるので、遂に休えきらずして逃げ出してしまった。そして古城というところへ逃げ入ったり、トンネルに逃げ込んだり、実に右往左往の乱走である。

現地研修

毎月、第4日曜日に市内の史跡や文化財をめぐり、現地研修を行います。第一回目は5月28日(日)午前9時に海潟の「さくら公園」に集合し、「櫻島焼亡塔」や「近衛信輔の腰掛石(公卿石)」などを見学します。雨の場合は中止です。

連絡先 (090—2586—1714)

自分も小麦畑の中を走っていて打ち倒れた。起きようとするけれども立つことが出来ぬ。是は必ず足の辺りをやられているに違いない、と悲観に落ちながら手で探ってみると、それは麦にからまっているのであって怪我ではなかった。それと解ると安心して元気を奮い起こし、またく走り出した。

この騒ぎは吾等ばかりでなく、同時に町の人々も狼狽して逃げ出したが、それが又一段と輪をかけて大騒ぎとなり、真にもつて気の毒なことであった。一人の老婆が幼児の手を曳いて逃げる、その惨ましい姿を傍らに見て、自分は己を忘れて憐憫の情に打たれ、願わくはこの人達に怪我なかれかしと心中に念じつつ走ることであった。

トンネルに遁げ込んだ人達は、畳をもってその入口を塞いで弾丸よけにしていたのであるが、遂にはそこをも捨てて古城の方へ逃げて来た。この日、わが垂水の坂田源次郎も本田壮八も戦死した。それから不思議なものである、というのは清水の人で足を撃たれて歩けぬのを、その戦友二人で左右から抱えて引き上げて来居ったが、また流れ丸が来てその負傷者の腕に当たった。そして抱えて居る兩人はかすりもしなかったのである。

さてこの戦いは非常な大敗で、全隊わずかに五、六十人ほどしか残らぬという、実に惨憺たるものであった。

この時、鹿児島島の米倉人足などを駆り出し、例の角力取りの岩千代など、その他百人ばかりの新手をもって補充された。即ち前の赤松峠のあの連中であろう。

臼杵に出づ

一時は古城にも遁入して居たものの、とてもこんな物凄(ものすし)い所に長居(ながい)が出来るものでなく、再び逃げ出してただひたすら東を望んで走った。

遂に臼杵の海辺に出た。ここでは敵兵不意を喰らって狼狽(ろうばい)してそこにある城の上へ逃げた。それを追撃して更に海の方へ追い出したのは面白かった。敵は海中に飛び込んで、沖に碇泊(碇はく)の軍艦目指して泳ぐ、それをボートに救い揚ぐる光景もまた一興であった。軍艦から盛んに砲撃したけれども別段被害もなかったから、遂に尻を落ち着けて一週間ばかり居た。

永井村に立て籠る

「大勢、日に非なり」で、またまた退却せねばならなかった。佐伯まで十八里(約七十二km)の道を一睡もせず歩くつらさ、田圃(たんぼ)道で田の中に眠りこけて落伍(らくご)した者などもあった。翌日はまた重岡まで行き、そこにも長く滞陣(ちぢん)はできず、遂に日州(日向)永井村まで退却して、全軍ここに立て籠ることとなった。

かかる時の将帥(しょうすい)たちの憂慮(うれ)をよそに、われわれ兵卒の気楽さはただ朝夕の食事のこのみ考えていた。どこの町であったか、酒を湛(たた)えた四斗樽(よっとうず)を店先に据え、柄杓(ひしゃく)まで添えてあったので、酒好きの人はもちろん、皆々喜んで飲んだ。又、あるところでは黒米(玄米)の飯を食わされた。それは冷遇の意でなく、精米が間に合わなかったのである。

又、重岡かどこかではお寺に宿がとってあったが、若い者どもがその木魚を叩いてみたり、あるいは鐘を鳴らしたりして読経の真似をしたり、まるで命がけの戦争に來ている人とも思えぬ程な無邪気(むじゃげ)なのんきさであった。

永井村に立て籠ったころは、ちょうど長雨の季節であった。そして幾日目であったか、いよいよ切り破りという事になった。

(以下次号)

—たるみず春秋—

夏来る岩間に響く水の音

野間慶子

本城川を遡(さ)っていくと、猿ヶ城溪谷に行き着く。清冽(せいれつ)な溪流は市内外の人々の水遊び場として、また夏のキャンプ場として賑(にぎ)わいを見せる。また近年はキャニオニングのメッカとして注目を集める。溪谷には花崗岩の巨岩や奇岩が連なり、降り注ぐ緑と風のシャワーは爽快である。

(季語…夏来る・夏)

(文章…瀬角龍平)